

このひと

日本分析化学会会長に就任される

早下 隆士 氏

(Takashi HAYASHITA)
上智大学理工学部教授

1958年3月6日生。1980年九州大学工学部卒業，1985年同大学院工学研究科博士後期課程修了，工学博士（九州大学）。同年神奈川大学工学部助手，1989年米国テキサス工科大学博士研究員，1992年佐賀大学理工学部助教授，1997年東北大学大学院理学研究科助教授，2005年上智大学理工学部教授，2011年上智大学理工学部長，2014年～2017年上智大学学長。1993年本学会奨励賞，2003年シクロデキストリン学会奨励賞，2007年日本イオン交換学会学術賞，2014年シクロデキストリン学会賞，2014年日本イオン交換学会賞，2020年本学会賞。2018年本学会副会長，2019年本学会関東支部長，日本イオン交換学会会長，2020年ホスト・ゲスト-超分子化学研究会会長，シクロデキストリン学会会長。

早下先生，日本分析化学会会長就任おめでとうございます。ご本人がめでたいとお感じかどうかは別として，困難な時期に最も適切な方が会長に選ばれたことを，大変喜ばしく思っております。多くの会員の方々に，この点ご賛同いただけるものと存じます。

早下さん（以降，普段通り「さん」付けで書かせていただく）と初めて会ったのは，1988年の暮れか89年の始め頃だったと記憶している。当時，早下さんは神奈川大学の助手をされていて，アメリカのTexas Techにポスドクとして赴任するに際し，Texas Techのことや大学のあるLubbockについて話を聞きたいとコンタクトがあった。私は，その直前1988年の10月までTexas TechのDasgupta教授の研究室でポスドクをしていたので，最新の情報が得られると期待されていたことだったと思われる。早下さんは，九州大学で上野景平，高木誠両先生に師事された，機能性分析試薬開発の本流とも言うべき分野を研究フィールドにしている。一方私は当時専らイオンクロマトグラフィーを研究していたので，同級生でありながら（今となっては，頭髪の量に差はあるが・・・）それまで全く接点がなかった。Texas Techでの所属研究室も異なり，早下さんはクラウンエーテルなどのイオン認識の専門家であるBartsch教授の研究室に滞在した。Texas Techは決して有名大学ではなかったし，当時日本人にとってはなじみの薄い大学だった。そのようなマイナーな大学の同じ部署の研究室に，時を前後して留学することになったことに縁を感じた。

早下さんが日本に帰って来られてからは，主に学会などの機会によく語らうようになり，30年来親しくさせていただいている。また，Texas Techにはその後多くの日本人研究者が留学しており，早下さんと私が音頭をとって，ICASやPacifichemなどの国際会議の際に，Bartsch教授やDasgupta教授を交えて同窓会のようなものを何度か開催した。早下さんがBartsch教授から厚い信頼を得ており，また他国からの同窓生からも慕われ



ていることが良くわかった。

早下さんが上智大学の教授に着任されたとき，私は既に東京工業大学に在籍していた。互いに異なる地域を巡って，最終的に東京に落ち着くことになり，学会活動でも協力する機会が増えた。2013年の暮れに関東支部の使者として早下さんと二人で山梨大学に出かけ，2015年の討論会の実施をお願いした。その帰りの電車の中で，「もしかすると学長になるかもしれない」と打ち明けられ，正直驚いた。適任だと思ったが，分析化学会の仕事を頼めなくなるといったのが個人的に一番のショックであった。本来であればもっと早く分析化学会の中心的な役割を担っていただくべきところ，最近まで公務があまりにご多忙で学会の要職をお願いできる状況にはなかったわけである。学長を退かれ，やっと早下会長として活躍していただく機会が巡ってきた。

さて，日本分析化学会は未曾有の危機的状況にあると言わざるを得ない。前々期会長を務めた私の責任は逃れられず，早下さんに事態の收拾をお願いすることになるのは誠に心苦しく，申し訳ない。とりわけ深刻なのは，理事会が決めたことが実行されない体質と，経営に余裕があり，会員が一人に達しようとしていた過去を引きずっている点である。昨年急逝された内山会長のご下命で，私が主査となり会員数3000人を想定した日本分析化学会の運営についてタスクフォースを結成して，理事会に多くの案を諮問した。理事会では承認され，その方向で進めることが決定されたが，この中で実行された，あるいは今後実行されそうなものはわずかである。各委員会や事業担当者は，学会のために頑張ってくださいている。しかし，現場には危機感が十分に伝わっておらず，全体像が見えている執行部との間に乖離が生じている。つまり情報の共有不足が根本的原因の一つである。改革には種々の軋轢が予想されるが，このような時にこそ早下さんの高いマネジメント能力と人間力に裏打ちされた包容力がものを言うに違いない。

日本分析化学会，そして学術としての分析化学を次の世代，またその次に引き継ぐために今が正念場です。早下会長の下，皆でアイデアを出し合い，この危機を乗り越えましょう。早下さんなら明るい未来をつかみ取れると信じています。

〔東京工業大学理学院化学系 岡田哲男〕